

サンクト・ペテルブルグ通信 PART2

(2007/8/23 ~ 28)

今回は2度目のサンクト・ペテルブルグ旅行となったが、すでに2002年の旅行記「サンクト・ペテルブルグ通信」もあり、部分的にそれを紹介しつつ、今回旅行の主なトピックスをテーマごとに私の理解した範囲でお伝えすることにした。

8月23日

早朝5時過ぎ、迎いの関西空港シャトルタクシーに乗車、7時過ぎに関西空港国際線窓口で長砂先生、ユーラスツアーズの金森さんたち一行23人が集合。きびしい手続きをすませて9時40分離陸。まずは大韓航空機で韓国インチョン空港へ。午後2時25分のサンクト・ペテルブルグ便に乗り換えて出発。5年前のウズベキスタン(タシケント)経由では大幅に時間がかかり、ブルコボ空港到着は真夜中、朦朧とした状態で一気にベッドに倒れこんだが、今回は夕方7時前(現地時間)に到着。

今回5連泊するサンクト・ペテルブルグホテルは巡洋艦オーロラ号が正面眼下に見渡せるネヴァ河岸のかなり古い建物で、遠く市内の寺院や教会の尖塔やエルミタージュ美術館も望むことができる。現地ガイドはゾーヤさん。

空港周辺は開発が進行中で高層ビルや高速道路が建設中、本来は田舎町で空港しかなかったが、サンクト・ペテルブルグ300年を転機として様相を大幅に変容させようとしている。

前回の旅行は2002年8月だったが、その時は「来年がサンクト・ペテルブルグ300年記念」ということでペトロパブロフスク要塞もスモリーヌイ修道院も工事中だったが、その後昨年7月、サンクト・ペテルブルグでサミットが開かれたり、日産についてトヨタの大規模工場の開設も進行中で、確かにまち中の観光客も大幅に増えている様子が見て取れた。

「300年で何が変わったんですか」と質問したらゾーヤさんは「新しくなったがこの街は特質を無くしているように思う。建物は建築アンサンプルで統一されていたが、エリツィンの時代からニューリッチが宮殿を買い取りコンクリートとガラスのモダンな住宅を建てるようになりました。私たちは賄賂でのごうしたやり方を許せなかったのでモスクワの文化省に手紙を書き中止させました。あの人たちの頭は空っぽです」「(「そうだ。京都も同じだ」)ホテルの後側に工事中的マンションは明らかに高さ違反。「何事も賄賂です」とあきらめ顔のゾーヤさん。途中で見かけたビルは表の壁だけ残して内部を建築中だったが道路に面するスタイルは変えないという姿勢がこの街を守ってきたといえる。

レニングラード攻防戦では市街地の1/6が破壊された。イサーク寺院は守り抜かれたが、柱には爆弾や砲弾のあとが残っている。金箔のドームは黒く塗られ、周りには気球がいくつも上げられて戦闘機が近づけないようにして爆撃を避けた。エルミタージュは屋上に緑の網を敷



ホテルの窓から巡洋艦オーロラ号が目の前に



5年前にはなかった巨大な噴水

いてカムフラージュされたが3カ所地下室まで貫通した爆弾で破壊された。郊外のエカテリーナ宮殿はドイツ軍に占領されたので完全に破壊された。

ナチス・ドイツ軍も破壊できなかった街に超高層ビル!?



高層ビル予想図

サンクト・ペテルブルグにガスプロムネフチ社が入る高層ビル計画が持ち上がって大騒ぎになっている。この計画は、ガスプロム主導の「ガスプロム・シティ」建設計画だったのが、ペテルブルグ市も出資し、一般娯楽施設も含む「オフタ・センター」となったもの。総建設費は、約 600 億ルーブルで、51 パーセントをガスプロム社、49 パーセントを市が負担する予定。施設の中心となる高層ビルの高さ 350 メートル。しかし、この建設計画には反対の声もある。今までペテルブルグ市で一番高い建物と言えば、テレビ塔で 311 メートル。ペトロパヴロ教会の尖塔で 122,5 メートル、イサク聖堂が 101,5 メートルと、18 - 19 世紀に建てられた教会や聖堂だけ。一般の建物は、市の景観を崩すということで、地区によって高さが制限されている。実は、この高層ビル、当初は 395 メートルになる予定が、反対に押され段々低くなってきた。ユネスコは「このまま計画が進められるなら世界遺産登録は取り消す」と猛反発している。

24日

今日の予定はペトロパヴロフスク要塞、ピョートルの小屋博物館、人類学民俗学博物館などの市内観光。まずは「血の上の教会」この町でもっとも高く目立つ教会はイサーク寺院とこの教会。次はイサーク寺院を回って青銅の騎士像へ。

今回は人類学民俗学博物館が組み入れられた。ピョートル大帝は、何にでも興味を示し、自然界と人類における珍しく希少なあらゆるものを収集したが、彼のコレクションは、クンシュトカメラ（珍品の収集保管所）と名づけられた建物が今の場所に 1728 年に開館した。現在コレクションの数は 100 万点を超え、世界でも類を見ない人類学・民俗学博物館で、エジプト、インドをはじめ陳列は世界各地の民俗資料におよぶ。もちろん日本の展示室もあり、仏像、鎧、神社模型、雛壇、ビデオは時代祭り、西陣織機の実演も。（日本に関する所蔵品は約 9000 点）「撮影禁止」の室に入ると大きなガラスの入れ物に入った胎児が陳列されていたが、奇形児の標本だった。この時代医学も大



インドの神様？



中に人が入れる地球儀

きく発展し研究が進んだことがうかがえる貴重な資料だった。入り口ではすごい行列で「何時間待ちかな」と心配していたら、ゾーヤさんは「こちらへ来てください」と半地下の裏口からすいすいと入場。外国人団体客は別扱いらしい。さらに別棟の「天文台」には細い階段を上り詰めると最上階に大きな地球儀が、内部は天球図（星座）が描かれてあり、大型・小型の天体望遠鏡がいくつも設置されている。今でも十分使えるような機材だ。しかし、地球儀の地図でオーストラ

リアはタスマニア島が島として分離されていないなど、この時代の世界認識に限界があったことも理解できた。

24日夜はアレクサンドリンスキー劇場のエプロン席で「白鳥の湖」。(写真右)25日はエルミタージュ劇場の「ジゼル」だが、私はエルミタージュ劇場は5年前に行ったので今回はパス。サンクト・ペテルブルグの劇場といえばマリンスキー劇場もあるが今回は公演がなかったのだろうか。



25日

今日午前中はエルミタージュ美術館。私は別行動でエジプトの間、ギリシャ・ローマの彫刻の間へ。館内のカフェのインターネットサービスで日本のニュースなどを確認。

午後はロシア美術館。ロシア美術館はサンクト・ペテルブルグではエルミタージュと並ぶ国立美術館だが、知名度の点ではやはりエルミタージュだ。しかし前回の旅行で「エルミタージュへ行って来た」というと「ロシア美術館はどうでした。あそこは日本画の京都市美術館と同じようにロシアの作品が展示されていますよ」と美術の先生から教えられた。

もとはミハイロフ大公の宮殿として1825年に建てられたが、その後の改築工事が施され、1898年に国立民族造形美術館としてオープンした。ロシア美術館のパンフレットを読むと「所蔵40万点」とあるが「エルミタージュからロシア絵画のすべてと彫刻などがロシア美術館に移された」とある。革命後も国立美術文化大学のコレクションも移管され一層の充実を見ている。やはり見る価値があったといえる美術館だ。



イリヤ・レービンの「1901年5月7日国家評議会会議」

展示は 古代ロシア美術=主にイコン画像が5000点、宝飾品等1500点 18世紀ロシア美術=「ピョートル大帝からエカテリーナ女帝まで」の時代の作品 19世紀ロシア美術、20世紀ロシア美術となっているが、圧巻はなんといってもイコン画像、ナポレオンと戦い革命前夜の様相を呈していた19世紀の作品群の多さ。

真夜中のネヴァ河のクルーズ

夜間のエルミタージュのライトアップの写真をとりたいと思いあって12時前、岸辺の道はその方向にむかって歩いて、ペテロパブロフスク要塞の入口まで来ると、ま夜中なのに遊覧船の案内が。もしか?と思って「エルミタージュも通るか?」とたずねると「行く」という返事。300ルーブリ払うとやがて12時半に出発。波しぶきをあびながらしだいに川下へ。

エルミタージュの岸の橋はすでに中央が八の字型にはね上がっている船はそこでUターンして川上へ。昼間通ったフォンタンカ運河へと進みやがて再びネヴァ河に出てさらに川上の橋へ向う。ところが橋の手前でストップ、おかしい、どうしたのかと見ると次々と船が集まってきてストップ。橋を見るとハネ橋が今まさにゆっくりと上がりはじめたではないか。時刻は午前2時直前、そうだったのか。ハネ橋の上がる瞬間に船が集まっていたというわけ。あわててビデオカメラで撮影。そして午前2時船つき場に帰着、要塞の塔の鐘の音が夜空に響きわたっていた。



午前2時、橋があがり始めた

旅のスナップ おまわりさんの「アルバイト」?

25日の早朝、ホテルの前でおまわりさんが一人でスピード違反の取締り。手にスピードガンを持っていて車に合図すると、車はその場に急停車、おまわりさんが近づいてなにやら（多分免許証・パスポートかな？）質問。しかし日本のように違反切符を切るわけでもなく、やがて何もなかったかのように車は発進。

あとでガイドさんにきくと、取締りではおまわりさんが時には「うちも大学生が二人いて大変なんだよ」とかいうらしい。あからさまに要求はできないので暗に「袖の下」を、ということだそうだ。そうするとこれはおまわりさんのアルバイト？



26日

ホテルで朝食の後、今日のツアーはペテルゴフとツアールスコエ・セロー ピョートル大帝の夏の宮殿、ツアールスコエ・セローのエカテリーナ宮殿で5年前に行ったところなのでパス。

ツアーは 古都ノボゴロドの旅 で前回ペテルゴフをたずねた人たちが中心。ガイドはワロージャ（ウラジミール）さん。朝7時出発で10時半ころに到着、ところが現地ガイドさんは11時半の約束でまだきていない。サンクトペテルブルグより南へ約190km、ロシアで最も古い町のひとつ、ノボゴロドはリュリク王朝創設以来、600年以上の間ロシアの中心として栄えた町。数多くの古い聖堂や教会が残っており、ロシア最古の建物ソフィア大聖堂もある。ノボゴロドはハンザ同盟の交流の中心地の一つとして栄えた歴史を持つが、サンクトペテルブルグとモスクワの中間点にあたるこの都市は「お金持ちの町」として栄え、当時ほとんどの市民は読み書きができたという。まずは古い教会へ、3つのそれぞれ別の年代の教会がありその一つは「周りを裸足で3回まわると良縁が実現する」という言い伝え。自然博物館には「木の教会」が。



木の教会



ノボゴロドの城壁

ワロージャさんのお話

バスの中でのワロージャさんの率直な話にはいろいろと興味を引かれたが、中でもロシアの政治の問題ではきびしい見方を披露してくれた。

サンクトペテルブルグは「英雄都市レニングラード」というもう一つの名前を持っていますと紹介、話を聞いていると誇り高い市民としての感情が伝わってくる。

ワロージャさんはサンクト・ペテルブルグの市長顧問をしていたプーチンに2、3回会ったことがあるそうだ。「大統領になるような人物には見えなかった」というが「今のロシアでは誰がなにを言おうと自由です。ただしマスコミも市民もプーチンにたいする批判を除いては。ロシアには政府から独立したマスコミはありません」と政治的批判はかなりきびしい。現サンクト・ペテルブルグ市長のマトヴィエンコ女史にたいしても「私の周りには彼女に投票したという人はひとりもいませんが、なぜか85%の得票で当選しました。不思議です」とい

う。

マトヴィエンコ市長はプーチン大統領と近い関係にあり、憲法上大統領は3選禁止となっているが、「マトヴィエンコ・サンクトペテルブルク市長など行政手腕に富むテクノクラートが中継ぎ的な大統領となり、2012年にプーチン氏が再び立候補するとの予測も根強い」(大橋巖ジェットロセンサー-2007/1 モスクワ・センター) という観測もある。



27日

今日は～レーニン記念の地めぐり。まずホテルの近くのフィンランド駅へ。レーニンが革命情勢近し！ということでスイスからロシアに隠れて帰国するに当たっての封印列車がガラスケースの中に展示されている。



スモーリヌイ修道院

ここはレーニンを中心とするボリシェビキが革命の指導にあたった革命本部となった建物で、レーニングラード・ソヴィエト中央委員会、中央執行委員会が置かれた。モスクワに首都が移るまでレーニンは革命前後をスモーリヌイの一室に住み執務していた。寄宿学校は現在はサンクト・ペテルブルグ市役所として使用されている。今回は特別許可を得て内部の見学が許された。2階のレーニンの執務した部屋の前の廊下の壁には大理石に掘り込んだ革命憲法が掲げられている。



スモーリヌイで演説するレーニン



スモーリヌイのレーニンの居室

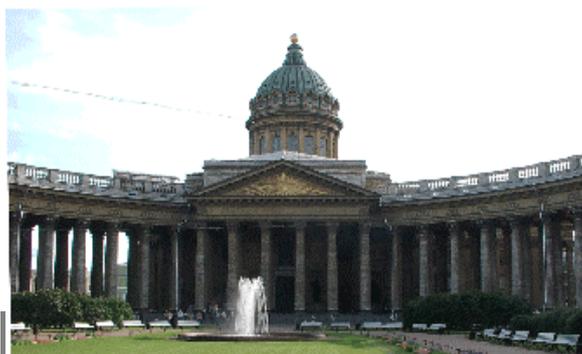


執筆中のレーニン

次はアレクサンドルネフスキー寺院の芸術家の墓地へ、6年前にもきたので省略。午後は、レーニンが革命の構想を練ったといわれる、ペトログラード郊外のラズリフ湖を訪ねる。記念館とはいえ今はほとんど訪れる人もなく、駐車場には私たちのバスだけ。しまっているのかと思ったがドアをたたくと開けてくれた。中は天井からつるされた大型の透かしの写真とわずかな展示。(右上のレーニンの写真) レーニンとクルプスカヤ、スベルドロフ、コロantai、イネッサアルマンドなど。

市内に戻り、ネフスキー通りを散策、みんなはショッピングということになったが、私はどうしても近くのカザン聖堂を見ておきたかったので、単独行動。ロシアがナポレオンとの戦争に勝利したことを記念して建設されたという寺院でアーチ型の正面の庭園を囲むように配置された回廊がとても美しい。残念ながら

カザン聖堂



内部は撮影禁止。それにしても中心のアレクサンドルネフスキー大通りは市民と観光客で溢れかえていた。6年前とは大違い。

『ニコライ宮殿』にて、サヨナラ夕食パーティ。ここで一同そろっての自己紹介。次々この旅行への期待や感想が語られる。会場をホールに移してフォークロアショーを鑑賞。出演はコサックダンスの一団。これが陽気で楽しい。



陽気なコサックダンス



これは一人が二役を！

28日

ホテルで朝食後、チェックアウト。午前中は巡洋艦オーロラ号へ。午後は郊外のエラーギン島へ。エラーギン宮殿と庭園の見事な景観から、この離宮はヨーロッパで最も美しい非シンメトリー様式の「イソラ・ヴェラ（美しい島）」と呼ばれている。夕方、空港へ向かい、帰国の途に。



エラーギン宮殿

スナップ ふえている観光客



中国海軍部隊隊員

町の中心のネフスキー大通りをはじめ、観光客の多さには正直驚いた。5年前はそうでもなかったように思うが、京都で言えば「桜の季節の哲学の道」か東山五条の「清水道」のようだった。車の渋滞も相当なひどさで目的地を目の前にして時間がかかる。通りは左折禁止（ロシアは右側通行）だから狭い通りを（しかも駐車がいっぱい）右折・右折・右折で左折することになりこれも時間がかかる原因。巡洋艦オーロラ号の時、たくさんの軍人が集合写真などを撮っているのでよく見ると「中華人民解放軍海軍」の襟章をつけている。どうやら中国海軍部隊が民間人としてでは

なく「軍隊」として来ていたようだ。

<資本主義・ロシア>

ワロージャさんの話では、ロシアでは8000万人は日に30ルーブル（約150円）の収入しかなく、給料は1週間でなくなる。どうしているかというと「自給自足です」という。自分の食料は自分で作るということだ。「医療も教育も無料の制度はあります。医療では複雑な手当や特別な処置ではお金がかかります。無料の医者には朝早くから並ばなければなりません。所得の低い人たちや年金生活者は無料の医者にかかります。お金のある人たちは有料の医者にかかります。すぐ見てもらえます。学生も30%くらいは授業料は免除ですが、まもなく全員負担となるという“うわさ”があります」という話。

< 躍進するサンクト・ペテルブルグ経済 > < マトヴィエンコ市長の演説から >

ペテルブルグでは現在世界的に名声のある会社が進出しています。私たちに、ガスプロム、ルックオイル、ロスネフチそしてトランスネフチと言った大財閥企業の参加する企業が設立されています。市の納税者として、トランスネフチプロダクト、シブル・ホールディング、トランスアエロ、ロシアで最大級の商業銀行ヴェネシトルグバンクと言った企業が登録しています。

世界の最大級の自動車メーカー「トヨタ」に続いて、「日産」、さらに「ジェネラル・モータース」もやって来ます。ロシアが資本投下にとって最良の国であるとするならば、その市場に進出するための最良の都市はペテルブルグであるという公式が証明されたわけです。

< KGB 帝国 ロシア・プーチン政権の闇 >

ワロージャさんは「ロシアのプーチン政権はマフィアとKGB（国家保安委員会）の操り人形です」ときびしい見方を語ってくれたが、帰国して「KGB帝国 ロシア・プーチン政権の闇」を読んでこれがロシア知識人の本音かも知れないと思った。

ブレジネフ（1982年死去）からゴルバチョフの政権の時期、ソ連経済は「計画経済」と軍拡競争などによって事実上破綻をきたし、国民生活は次第に厳しくなっていた。ソ連共産党幹部の腐敗と無能力状態の中で「国家の実態を把握して、共産党を壊して実権を掌握できるのはKGBだけ」といわれていた。ゴルバチョフ・エリツィンの確執とクーデター騒ぎの中でソ連邦が崩壊、共産党が解散。資本主義・市場経済のなかで暗躍するマフィア、軍と行政機関をにぎるKGB、その申し子が今のプーチン大統領であり、かれはKGB幹部要員出身だ。マスコミの掌握、マフィア対策や実体経済の統制、チェチェンなど戦争の指揮、そして「危険人物の暗殺」、選挙結果のでっち上げ、こうしてみるとロシアの未来は暗いようにしか思えない。しかし、ロシア人はかなり正確に国のあり方を見つめているのも事実。軍事政権の長かった韓国やチリをはじめ南米諸国の民主化への急激な変化などを思うと私はロシアに希望を持ちたい。

